

西部開発事業（畠地帶総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

丸 山 城 跡

1980

伊那市教育委員会

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

丸 山 城 跡

1980

伊那市教育委員会

序

長野県伊那市西春近は古くより城跡の多いところとして知られていました。ここ数年来城跡に関して考古学的な方面からの調査が行われるようになってきて、文献では不明であった点が次々と解明されてきました。

ここに報告します丸山城跡も地元の人々は城である事実を知っていましたが、誰のもので、あるかは誰一人として知りませんでした。

この度、当地区が伊那西部土地改良事業の該当地区内であるとのことで、工事着工以前に伊那市教育委員会が発掘調査を行った。

調査は昭和54年5月に行われ、多大な成果を収ることが出来ました。その成果は外堀、竪穴36基ありました。外堀の発見は本城跡が、内堀、中堀、外堀の3本より成り立っていることを証明してくれました。また出土した陶磁器は鎌倉時代のものが多い事実が判明しました。このことは、時代的にみて、当西春近地区を支配した工藤（小井豆）氏に関係した城跡である事がある程度解明できました。

最後に調査書の出版にあたって、調査に全面的に協力して下さった南信土地改良事務職員一同、直接、現場に於いて、調査指導下さった調査団の諸先生、土にまみれて、働いて下さった発掘作業員の皆様に心より感謝致します。

昭和55年3月4日

伊那市教育委員会

教育長 伊沢 一雄

凡　例

1. 今回の発掘調査は西部開発事業に伴なう、土地改良事業で、第6次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は昭和54年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆすることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美、友野良一

◎図版作製者

○遺構及び地形

友野良一、飯塚政美

○陶磁器実測 小木曾清

○石器実測 根津清志・飯塚政美

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一、飯塚政美

○遺物 友野良一・飯塚政美・小木曾清

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第Ⅰ章 這跡の環境.....	(1~3)
第1節 位 置.....	(1)
第2節 地形・地質.....	(1)
第3節 歴史的環境.....	(1~3)
第Ⅱ章 発掘調査の経過.....	(4 ~ 6)
第1節 発掘調査の経緯.....	(4)
第2節 調査の組織.....	(4 ~ 5)
第3節 発掘日誌.....	(5 ~ 6)
第Ⅲ章 造 構.....	(7 ~ 15)
第1節 城郭址と烟址.....	(9 ~ 13)
第2節 壘 穴.....	(13 ~ 15)
第Ⅳ章 造 物.....	(15 ~ 18)
第1節 陶磁器.....	(15 ~ 16)
第2節 石 器.....	(16 ~ 18)
第Ⅴ章 まとめ.....	(19 ~ 24)

挿図目次

第1図 位置及び西春近地区遺跡分布図	(3)
第2図 地形及び造構配置図	(7)
第3図 外堀、第1～21号竪穴、第28～36号竪穴実測図	(11)
第4図 堀址地層図	(13)
第5図 第22～27号竪穴実測図	(15)
第6図 出土陶磁器実測図	(16)
第7図 石器実測図	(18)
第8図 工藤氏の系図（信濃勤皇史次より）	(21)

表目次

第1表 竪穴要目一覧表（抄）	(14)
第2表 出土陶磁器一覧表	(16)

図版目次

図版1 遺跡遠景	図版7 造構
図版2 造構	図版8 造構
図版3 造構	図版9 遺物出土状況
図版4 造構	図版10 出土陶磁器
図版5 造構	図版11 出土石器
図版6 造構	

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 位 置

丸山城跡は長野県伊那市大字西春近南小出に、また、犬田切川左岸河岸段丘上、天竜川右岸第二河岸段丘面、さらに権現山麓よりの押し出した接点面に位置している。城跡の現況は畑や山林に利用されている。

丸山城跡に至るまでの経路は単純でわかりやすい。国鉄飯田線下島駅を降りて、西を眺めると、信盛寺の山門が見える。この道路を西へ登り坂を50m程行くと、二俣に分れている地点に着く、この地点で順路を南にとり、登りつめた北側の山林地帯が城跡である。

第2節 地形・地質

伊那市西春近地区の地形は天竜川右岸河岸段丘にそって南北に細長く縦谷状地形を成している。天竜川に流れ込む支流は北より小黒川、戸沢川、小戸沢川、犬田切川、猪ノ沢川、藤沢川、堂沢川等々の小河川が存在し、これらは天竜川と接する地点で解析状地形を成し、高い段丘を形成している。なかでも本遺跡地に密接な関係のある犬田切川について述べてみることにする。「犬田切川は伊那市西春近権現山の南の谷を直線的に流れて、沢渡で天竜川に注いでいる。全長約6km、谷川で洪水に急速にに出水して下流部は荒廃がはなはだしい。」(註1)

当遺跡地の存在する長野県伊那市西春近南小出地籍は、西は権現山塊(1,749m)をまとめて仰ぎ見るのが可能である。犬田切川は前に述べたように大部荒れたと見えて、各種の花崗岩礫層の上にローム層が堆積している。表土面から礫層までは浅く、2m程で同層に達している。これは同河川が新しい時期まで不安定な状態を成していたことを物語ってくれる。

第3節 歴史的環境

伊那市西春近地区は木曾山脈に連なる権現山麓よりその源を発し、西から東へ流れて、天竜川と合流する多くの支流が見られる。これらの小河川の両岸には、西へ行く程、高低差が少なく、東へ行くに従って、その高さを増していく河岸段丘が発達している。特に天竜川に接する地点は高さ20~30数mにも及ぶ段丘を成し、この状況を一般的に解析地形と呼んでいる。このような自然的条件に恵まれているために、数多くの遺跡が認められ、現在、確認されただけで78ヶ所に及んでいる。今後の遺跡の増加の可能性は極めて多い。その存在場所は山麓に近い地点に増加するものと思われる。特に、最近注目された中世の城館址は山城的なものを除いて、解析地形の富んだ地点に数多くみられ、自然を巧みに利用してある。現在確認されている城館址は山本の殿城、城の小出城、村岡の唐木弥七宅の東側、村岡の荒城(一説は新城とも言う)、下島のフブキ垣外、南小出の内城、南小出のタカノの敷地内、南小出の丸山城跡(今回発掘した)、表木の表木城、諏訪形の安岡城、柳沢の物見ヤ城である。

第Ⅰ章 遺跡の環境

ここで、各時代の代表的な遺跡を第1図より列記してみると次のようになる。縄文早期時代の遺跡としては、②細ヶ谷B、⑩百駄刈、③児塚、⑤山の根；縄文前期としては、⑪上島下、⑪上島、縄文中期としては、⑫北丘B、⑦常輪寺下、縄文後期としては、⑭百駄刈、⑭中原、⑫北丘B、縄文晩期としては、②城平、⑤山の根、⑯大境、⑬百駄刈、⑭細ヶ谷B、⑮菖蒲沢、弥生時代後期としては、⑤山の根、⑥山本、⑧上村、⑯南丘A、⑭富士山下、⑬安岡城、⑰城の腰、⑭横吹、⑭和手、⑭上手南、土師器としては城平上、城平、山の根、常輪寺下、上島、大境、百駄刈、細ヶ谷B、中村東、白沢原、名廻、名廻東古墳、名廻南、児塚、鎮護塚東古墳、南小出南原、薬師堂、唐木原、唐木古墳、北丘A、南丘B、南丘A、山の神、上の塚、下小出原、天伯原、表木原、菖蒲沢、富士山下、富士塚、広垣外1、広垣外2、鳥井田、高遠道、西春近南小学校附近、安岡城、城の腰、横吹、和手、宮入口、寺村、須恵器としては、城平上、城平、山の根、常輪寺下、北条、上島、大境百駄刈、細ヶ谷B、白沢原、名廻、名廻東古墳、カンバ垣外、南小出南原、薬師堂、唐木原、唐木古墳、南丘A、上の塚、天伯原、表木原、菖蒲沢、富士山下、富士塚、広垣外1、広垣外2、鳥井田、高遠道、安岡城、城の腰、横吹、和手、上手南、宮入口、寺村、灰釉陶器としては、天狗上、城平上、城平、山の根、上島、大境、百駄刈、白沢原、名廻、名廻南、カンバ垣外、南小出南原、薬師堂、唐木原、南丘A、天伯原、東田、下小出原、表木原、菖蒲沢、広垣外2、鳥井田、高遠道、安岡城、和手であった。

昭和54年12月31日現在、今までに発掘調査された遺跡を各種の開発事業に附隨して列記してみることによる。ただし、遺跡によっては各種の事業が重複した場合には何回にも及ぶことがあるが、承認願いたい。

中央道関係では、細ヶ谷B、百駄刈、山の根、北丘B、城平、大境、菖蒲沢、南丘A、富士山下和手、白沢原、名廻、名廻東古墳、名廻南、南丘B、富士塚古墳、山寺垣外、城平上、山本田代遺跡である。

大規模農道関係では北条、常輪寺下、小出城、浜射場、児塚遺跡である。

カントリー設置関係では浜射場遺跡である。

養蚕団地関係では菖蒲沢遺跡である。

西部開発土地改良事業では、上島、東方A、村岡北、村岡南、北条、常輪寺下、眼子田原、宮の原、中村、南村、東田、児塚、カンバ垣外、丸山、山の下、菖蒲沢、南小出南原、細ヶ谷Aである。

工場団地関係では南小出南原である。先の方で述べた城関係では小出城、殿城、唐木弥七宅の東側、荒城（新城）、フブキ垣外、内城、タカノ敷地内、丸山である。

殿城は城平遺跡、唐木弥七宅の東側は村岡北遺跡、荒城は村岡南遺跡、フブキ垣外は中村遺跡、内城はカンバ垣外遺跡、タカノ敷地内は南小出南原遺跡、丸山は（この報告書）、等々、それぞれの遺跡の名前を使用して各報告書に発掘の成果を記載してある。報告書の詳細な点は第V章まとめの参考文献を見てもらいたい。（飯塚政美）

参考文献

註1 上伊那郡誌（自然篇）

遺跡の名称

- (1)城平上 (2)城平 (3)常輪寺址
 (4)宮林 (5)山の根 (6)山本
 (7)常輪寺下 (8)上村 (9)北条
 (10)上島下 (11)上島 (12)東方日
 (13)東方A (14)村岡北 (15)村岡南
 (16)大境 (17)中原 (18)百駄刈 (19)
 西垣外 (20)細ヶ谷A (21)細ヶ谷B
 (22)小出城 (23)宮ノ原 (24)浜
 射場 (25)中村 (26)中村東 (27)山
 寺垣外 (28)白沢原 (29)名通
 (30)名通西古墳 (31)名通東古墳
 (32)名通南 (33)児塚 (34)鎮陵塚西
 古墳 (35)鎮陵塚東古墳 (36)カン
 パ垣外 (37)丸山城跡 (38)南小
 出南原 (39)薬師堂 (40)唐木原
 (41)唐木古墳 (42)北丘B (43)北丘
 A (44)北丘C (45)南丘B (46)南
 丘A (47)南丘C (48)眼田原 (49)
 山の神 (50)上の塚 (51)沢渡南原
 (52)下小出原 (53)天伯原 (54)南村
 (55)東田 (56)天伯 (57)下小出原
 (58)井の久保 (59)表木原 (60)山ノ
 下 (61)菖蒲沢 (62)富士山下 (63)
 富士塚 (64)庄垣外1 (65)庄垣外2
 (66)鳥井田 (67)高速道 (68)西
 春近南小学校附近 (69)安岡城
 (70)城の腰 (71)横吹 (72)和手 (73)
 上手南 (74)宮入口 (75)寺村 (76)
 下牧 (77)下牧経塚 (78)山本田代



第1図 位置及び西春近地区遺跡分布図

第Ⅱ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢、白沢、南小出地区が該当しました。本年度は南小出、諫訪形、細ヶ谷地区が該当し、特に、南小出の丸山城跡は遺跡地と思われる地区が数年来の荒地となっていたので、地主と相談して若葉の美しい5月上旬から下旬にかけて、発掘調査に着手致しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、丸山城跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

丸山城跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽映士	伊那市教育委員長
△	向山辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	北村忠直	伊那市教育委員会前教育次長
△	三沢昭吾	教育次長
△	石倉俊彦	社会教育課長
△	有賀武	△ 課長補佐
△	米山博章	△ 前係長
△	武田則昭	△ 係長
△	沖村喜久江	△ 主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学协会会员
副団長	根津清志	長野県考古学会会员
△	御子柴泰正	△

調査員	飯塚政美	長野県考古学会会員
タ	福沢幸一	タ
タ	田畠辰雄	タ
タ	小木曾清	宮田村考古学友の会会長
タ	春日徳明	大正大学学生

第3節 発掘日誌

昭和54年5月4日 発掘現場の下見、その整理、発掘器材の点検、修繕を行う。

昭和54年5月7日 テント及び発掘器材を現場まで運搬する。運搬終了後直ちにテント張りを実施する。幾年も荒らしてあったために、雑草（特に茅の繁茂が著しい）の刈り取りに時間を費やしてしまう。茅を切り倒していく途中で、きじや各種の小鳥の巣がしばしば見受けられた。

本日は一日中、いまにも雨が降り出しそうな天候で5月にしては肌寒い一日であった。顔なじみの作業員はひさしぶりの顔合せを喜こんでいた。

昭和54年5月9日 本日より本格的な発掘調査を実施する。グリット名は東をI区とし東から西へ1~21南から北へA~I、と決めて、そのグリット掘りを進めていく。遺物の出土はほとんどみられず、ところどころにピットの跡がみられたが、擾乱の状態が著しくて、その性格は把握できなかった。

昭和54年5月10日 グリット掘りを西へ、西へと掘り進めていくが、遺物の出土はほとんどみられず、あたり一面に擾乱の状態が著じるしかった。もう、本発掘地区には遺構は何も存在しないのではないかと思われる程であった。耕土の深さは西へ行くに従って、ゆるやかな角度で浅く成りつあった。

昭和54年5月11日 本日もグリット掘りを、さらに西へ、西へと拡張していくと、午後になって南北に幅4m位の範囲で黒々とした落ち込みがみられ、当初より期待していた堀址の発見となった。この時の様子は期たるべきものがきたという感じがした。

昭和54年5月12日 堀址のプラン確認を行う。プランは南北に細長く、



発掘風景

第Ⅱ章 発掘調査の経過

伸びているようである。遺物の出土は相変らず、何もみられなかった。堀は若干蛇行状を描き、南のわざかな沢へ抜けているようであるが、確定的ではないようであった。

昭和54年5月15日 堀のプラン確認に全力を注ぎ込む、この附近は耕土が浅く、ローム層面まで約10～20cm前後となっていた。従って、ローム層面中に桑の根がくい込んでいて堀の壁面をいためずに、掘りこぐに難済した。

昭和54年5月16日 堀のプラン確認に全力を注ぎ込む、夕方まで、堀址の全体的なプラン確認ができた。いよいよ、明日より掘り下げを開始する段取りとなったが、はたして何が出るか、星過ぎからくもり出して、明日の天気が心配の種である。ボンボン田植えが始まってきたようである。

昭和54年5月18日 堀の掘り下げを進めていくとともにその拡張をしていく。掘り下げていく工程で、堀のなかへ最後まで一輪車が入るような方法で掘り下げを実施していくが遺物の出土は何もみられなかった。

昭和54年5月19日 堀の掘り下げを進めていく、掘り下げは北側から南へと向って進めていくが、遺物の出土は何もなかった。ただ、堀底は大般に東西に平坦で、南から北へと傾斜しており、段丘崖へ抜け出る附近は深くなっていた。

昭和54年5月21日 堀の掘り下げを実施する。掘り下げを南へ、南へと進めていくが、遺物はわずかに陶器片や鉄くそ、砥石等の出土がみられた。

昭和54年5月22日 堀の掘り下げを実施する。

昭和54年5月23日 堀の掘り下げを実施する。

昭和54年5月24～25日 堀の掘り下げを実施する。

昭和54年5月26日 堀の掘り下げを実施する。

昭和54年5月28日 堀の完掘及び、堀の壁面近くに存在するP1～P21までの遺構の掘り下げ、完掘を終了する。ピット内からは何も出土せず、時代、あるいは何を意味する遺構かは不明である。P22～P36までの検出及で完掘終了。

昭和54年5月29日 堀址の清掃及び、P1～P21、P22～P36までの清掃、堀址とP1～P36までの写真撮影を終了する。P22～P36までの平面及び断面実測を行う。

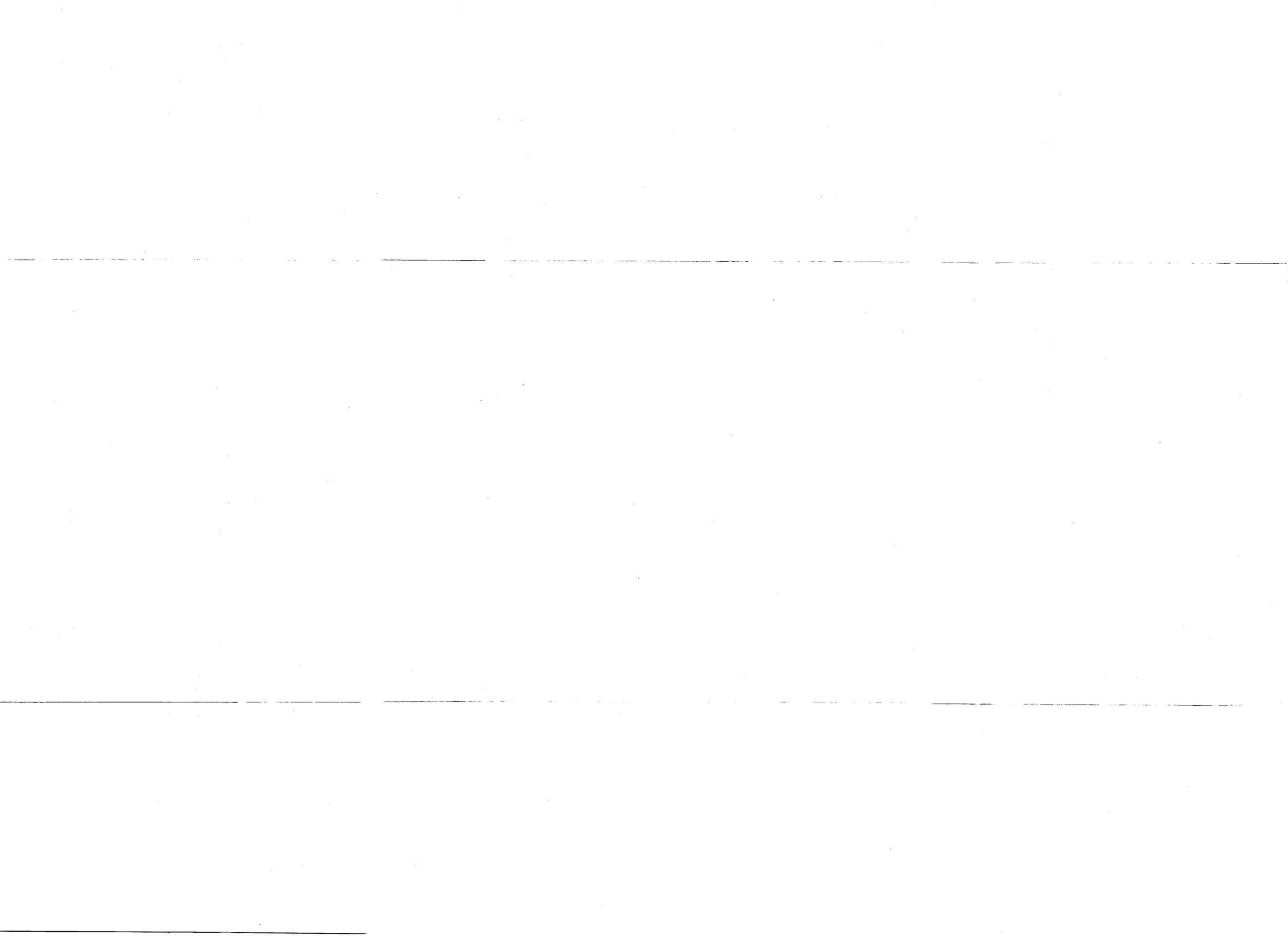
昭和54年5月31日 発掘器材の整理、テントの取りこわしを実施する。全測図の作製、全測図のなかへ堀の地形が判明するように縦断図、横断図が作製できるように考えてつくる。堀址とP1～P21までの平面及び断面実測を終了する。

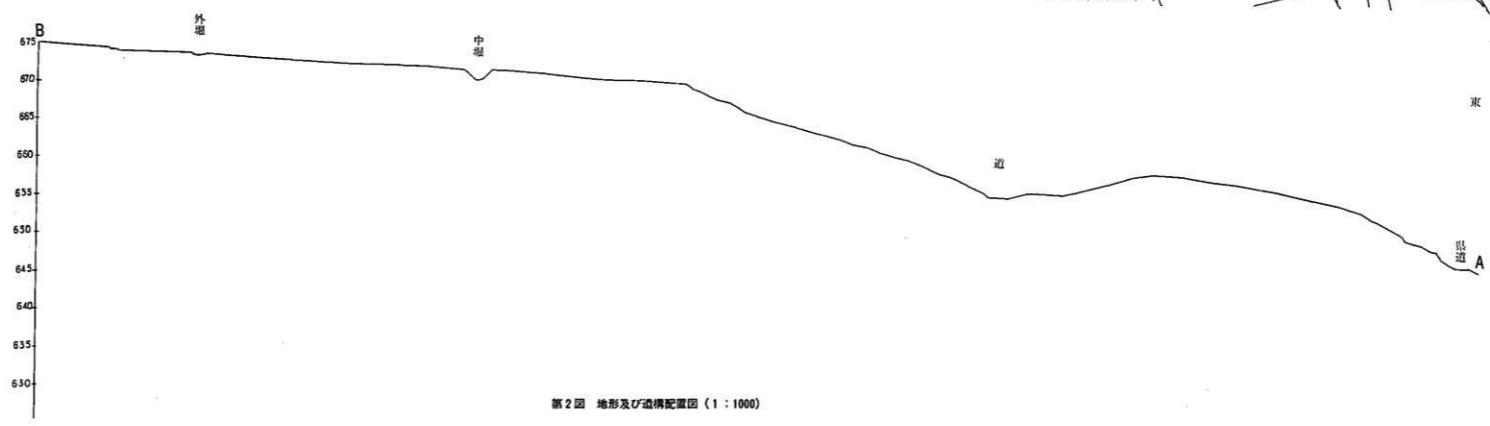
昭和55年1～2月 図面整理、原稿執筆、報告書の作製、報告書を印刷所へ送る。

昭和55年3月 報告書の刊行

(飯塚政美)

作業員名簿 平沢公夫、池上大二、平沢平治、赤羽幸寿、唐木淳、唐木聰、酒井とし子、北原幸子、北原一喜、酒井富江、中村美さを、原修一、後藤重美、登内政光、井口はる子、工藤りよ子、有賀鬼久雄、酒井達雄、大野田三千代、(敬称略順不同)





第2図 地形及D造構配図 (1:1000)

第1節 城郭址と堀址（第2～3図、図版2～5）

本城郭址は古くより丸山と呼ばれていること、また、堀址の存在からして、城のあったことは明らかであった。また、この地を中山城と呼んでいることを筆者はつい最近地主から耳にした。これは、単状的なものではなくて、類推するに、外城、内城と言うものがあって、一つのグループ的な城郭群を成していることと思われる。

外城と言う字名は不詳であるが、内城というそれは、本城郭の北側、細窓と言う洞をへだてた北側に現に存在している。由来、伝承、概説的な説明はこのくらいにして次に、城郭址の構造について述べてみたいと思う。

今回の発掘調査を実施するまでには堀址は2本確認されていたので、外郭部、内郭部の二つの郭より成り立っていると考えられていたが、今回の調査によって、新たに西側に堀址が、発見されたため、内郭、中郭、外郭の三つの郭を有する構造になっていることが明確化してきた。まず、自然的地形を考えてみると、南側は大田切川左岸河成第1段丘面と、西から東へ流れる小さな沢によって区切られ、東側は天竜川右岸第2河成段丘面には先に述べた細窓という洞によって区画的な様相を成していた。

標高は3郭とも674m～668m位の範囲内に含まれる。比高は6m位を測定できる。構築方法としては、東・北・南の三方面は自然的地形を巧みに利用し、西側は前の用件に適合していないので、南北に3本堀を掘り、より一層強固な防衛対策をとれる様なかっこうになっている。

内郭部は、最も東側に位置し、南側は北高10m位、東側は比高30m位、北側は比高18m位の高い河岸段丘の突端部に存在し、西側は内堀によってその境界を成している。内郭の平坦面は標高は668m位の範囲内、規模は南北45m位、東西27m位をそれぞれ測定できる。

平坦面の中央部よりやや北側によつたところに、石祠が祭られていたが、銘が判明しないので、直接本城郭に結びつくかは不明である。用地外であったために発掘調査は不可能により、ただ測量だけにとどめておいた。この区域内は最も発掘調査を実施したい場所であったことは否めない。現在は唐松林に利用されていた。

中郭部は内郭部と外郭部の間にはさまれた位置に存在し、東側は内堀、西側は中堀によって、一応、区画的なかっこうをとっている。規模は南北45m位、東西22mを測定でき、標高は669m位の範囲内に含まれはほとんど平坦であった。現在は南側では唐松林、北側は竹林、一部分ではあるが墓地にそれぞれ利用されている。用地外であったために内郭部同様に発掘調査は不可能であった。墓地造成の際に、地中から多量の遺物出土があったと、地主から聞いたが、その遺物は昔だったので、捨ててしまつて現在は何もないとのことであった。現在残っていれば、ある程度時代的な判明ができるものであらうが、本当に残念なことであった。

外郭部は城郭址のなかでは最も西側、東は中堀、西は外堀とにはさまれたところに位置している。規模は南北66m位、東西71m位を測定できる。この地を実際に発掘してみたところ、遺構らしきものは外堀と、外堀の結束に接して西から東へ流れる川筋、外堀の壁面や、その近くに存在する

第Ⅴ章 造 構

第1号竪穴から第21号竪穴、第28号竪穴から第36号竪穴、外堀の外側に検出された第22号竪穴から第27号竪穴であった。造構のうちで竪穴については後で述べるから今回は省略させていただくことにする。川筋は明らかに流れたとみえて砂の堆積が多量にみられた。これも用地外へと続いているので発掘不可能であった。

この川筋は近年城郭址を発掘調査して、しばしばみられる井を引いてきたものと思われ、いわば井筋の一種ではないか。ただ、遺物の出土は何もなかったので、確定的なものではないことをここに記しておこう。

内堀は大部分が埋ってしまった、その構築当時の規模は把握できないが、現存する規模では、上面幅4m、下面幅1m程、深さ3m程を測定できる。北側は細窪の洞へと、南側は小さな沢へと抜け出している。地主に聞くと、以前は、現状よりも深く断面はきわだった薬研状になっていたそうである。

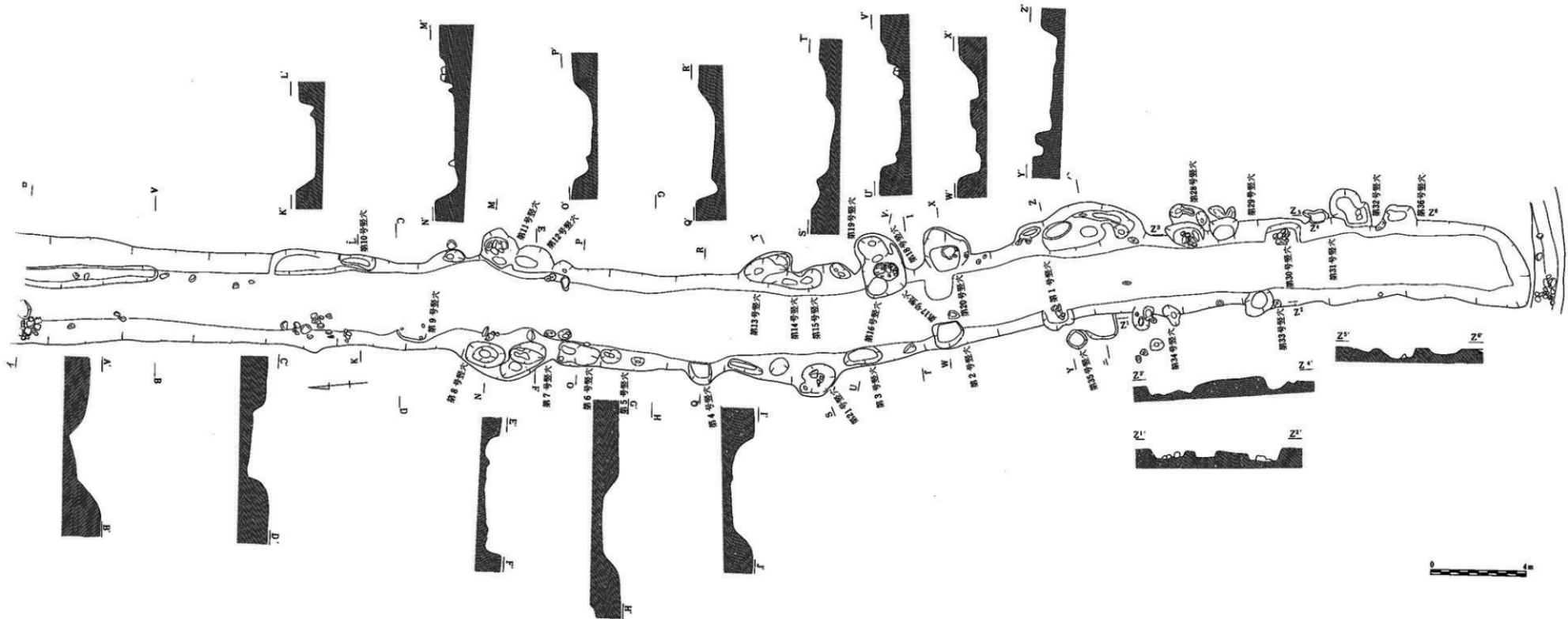
中堀も、内堀同様に埋ってしまった。現存する規模では上面幅8m程、下面幅2m程、深さ3m20cm程を測定できる。北側は細窪の洞へ、南側は小さな沢へと抜け出している。

外堀は発掘調査によってはじめて確認された。表土面より40~50cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築してある。その規模は上面幅では3m~5m50cm程、底面幅は2m~3.5m程を成し、深さは50cm~1m位の範囲内に含まれている。平面プランは南北に細長く、大般直線上にはなってはいるが、中央部附近と思われるところで、やや屈曲している。深さは、やや北側へ傾斜し、北側の細窪という洞の段丘崖と接する地点では幅も広く、深くなっている。一般的な堀のつくり方と同様であった。底面はハードローム層より成り立っていた。堀の南側の端末は円形状にカーブを描き、終りとなっていた。この部分が、おそらく入口だと思われる。壁面は竪穴の存在するところを除いて、大般かたく、なだらかな傾斜を成していた。堀のつくり方としては箱薬研に属すると思われる。竪穴と外堀は関係のある造構か否かは、現在のところ不明である。

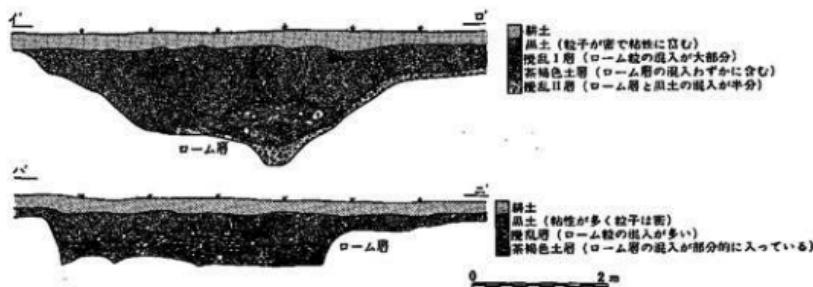
遺物は覆土中より縄文時代の石器が出土した。これは飛び込みと思われて、直接本造構とは何ら関係ないと思われる。本造構に結びつく遺物としては鎌倉後期古瀬戸灰釉四耳壺、鎌倉後期美濃こね鉢、鎌倉後期古瀬戸灰釉印花文瓶子、鎌倉後期古瀬戸灰釉合子、室町中期古瀬戸灰釉平茶碗の陶器片の出土をみた。石器としては砥石の出土があり、これは全て、中世と思われる。

最後に、外堀、中堀、内堀は同時期に構築されたものかは、内堀、中堀の構築状態がわからないので不明である。出土した遺物より本城郭址は鎌倉後期から室町中期に盛えたものと思われる。

遺物の出土量が少ないとから本城郭址は居館的なものではないと考えられる。（飯塚政美）



第3 四外墙·第1~21号竖穴·第28~36号竖穴实测图



第4図 墓址地層図

第2節 堅穴 (第3図・5図、図版2~5)

堅穴は発掘地区のなかで部分的に展開し、外掘の壁面及び、その近くに30基、外掘の西側に集中して6基、全部で36基検出された。堅穴の全般的な諸特徴、および諸々の問題等については第1表 坚穴要目一覧表(抄)に、述べられているので照合されたい。

堅穴要目一覧表(抄)は、そのプラン、形態、遺構、共伴遺物、特徵等について記し、比較検討に便ならしめた。一覧表の見方については項目的に簡単な内容の説明を附記し、同時に若干の説明をしておくことにする。

プランは平面、断面形の2方向から考えてみた。法量は大きさと深さを表示し、状態は床面と壁面を綿密に記しておくことにする。堅穴に伴な附隨的なものとして、ピット、配石の有無を記しておくことにする。

遺物は出土陶磁器と石器の項目を設けておく。陶磁器はその出土した形、あるいはその量、及び产地、時代による位置づけをしておく。石器はその名称をつけてある。備考については堅穴の諸特徴について、簡潔にしておくことにする。

図番号及び、図版番号、出土陶磁器図版番号、出土石器図版番号は、その番号のみを記しておくことにする。
(飯塚政美)

第Ⅲ章 造 構

第1表 壁穴要目一覧表(抄)

第1表 壁穴要目一覧表(抄)

壁穴	アーラン	法 量	状 態		小 穴	配石	造 物		備 考	図巻号	断面番号	出土周囲 断面番号	出土石器 断面番号
			平 面	断 面	(cm)	(cm)	床	壁					
1	隅丸方形状	不明×128	69	かたく 中央凹む	外傾軟器	あり			東壁ナシ 外傾 を切っている	3	6		
2	円 形 状	103×125	90	かたく 水平	外傾軟器					3	6		
3	長円形状	65×150	69	靴踏 中央凹む	外傾軟器					3	6		
4	隅丸方形状	90×90	81	かたく 中央凹む	かたく外傾					3	6		
5	ピット状	53×80								3	6		
6	長 円 形	80×155	68	かたく 中央凹む	外傾軟器	ピットあり				3	6		
7	不規円形	114×148	69	かたく 残あり	内傾軟器	ピットあり				3	7		
8	円 形	100×158	96	かたく 水平	外傾軟器あり					3	7		
9	隅丸方形状	不明×111	75	かたく 中央凹む	外傾かたい 水平				東壁ナシ 外傾 を切っている	3	7		
10	長円形状	55×140	57	かたく 中央凹む	外傾かたい					3			
11	四 形 状	150×138	28	かたく 水平	外傾強い かたい	あり				3	7		
12	四 形 状	110×155	68	かたく 中央凹む	内傾強度 かたい					3	7		
13	長円形状	120×191	32	かたく 中央凹む	内傾強度 軟弱					3	7		
14	ピット状	60×38								3	7		
15	ピット状	80×79								3	7		
16	ピット状	70×75	96	かたく 中央凹む	内傾軟器					3	7		
17	ピット状	71×100	72	かたく 中央凹む	直底かたい	あり				3	7		
18	ピット状									3	7		
19	四 形 状	110×110	25	中央凹む 靴踏	内傾かたい					3	7		
20	四 形 状	180×179	80	かたく 水平	外傾軟器	ピットあり	あり			3			
21	四 形 状	111×122	35	靴踏 中央凹む	金環研 かたい	ピットあり	あり						
22	隅丸方形状	145×100	31	かたく 凹みあり	外傾 凹みあり	ピットあり		古瀬戸灰陶 合子(複合後期)		5	5	10	
23	隅丸方形状	92×165	37	靴踏 凹みあり	内傾気味 凹み少ない			中国青磁罐(南北朝)	磁石4	5	5	10	11
24	隅丸方形状	107×99	25	靴踏 凹みあり	外傾 内傾気味					5	5		
25	椭 圆 形	55×100	18	かたく 弯曲狀	かたく 外傾内傾					5	5		
26	椭 圆 形	100×120	26	かたく 中央凹む	かたく 内傾強度	ピットあり			磁石1	5	5		11
27	椭 圆 形	42×79	50	かたく 大底凹む	かたく 外傾氣味	あり			磁 土	5	5		
28	不正円形状	176×181	43	かたく 凹みあり	外傾気味 凹みあり	ピットあり	あり			3			
29	不正円形状	88×110	35	かたく 水平	外傾軟器	ピットあり				3			
30	隅丸方形状	不明×140	49	かたく 水平	外傾軟器	あり			西壁ナシ 外傾 を切っている	3			
31	ピット状	47×110	18	中央凹む かたむ	外傾軟器					3	8		
32	だるまる形状	150×150	48	水平 かたい	外傾軟器	あり				3	8		
33	円 形 状	94×111	40	かたく 水平	内傾強度あり					3	8		
34	円 形 状	不明×82	39	かたく 凹み大	外傾凹凸	ピットあり			東壁ナシ 外傾 を切っている	3	8		
35	円 形 状	78×80	40	かたく 水平	外傾軟器				ピット状	3	8		
36	隅丸方形状	不明×130	25	かたく 中央凹む	内傾軟器				西壁ナシ 外傾 を切っている	3	8		



第5図 第22~27号竪穴実測図

第IV章 遺 物

第1節 陶 磁 器 (第1表, 第6図, 図版10)

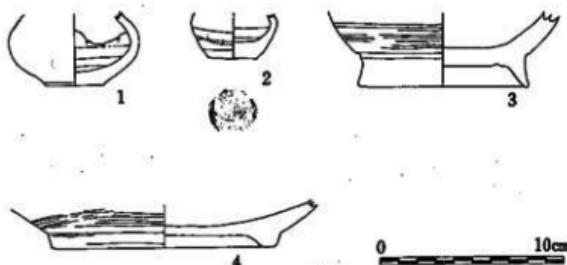
今回の調査で出土した陶磁器は、約20点で、大部分断片品である。陶磁器の種別をみると、古瀬戸系45%、瀬戸系40%、美濃系5%、中国系青磁1%、唐津物1%であり、古瀬戸系が約全体の50%近くをしめている。

時代的にみると、鎌倉中期10%、鎌倉後期35%、南北朝5%、室町中期5%、室町後期5%、江戸期40%である。

器形からみると、日常食器類、(雜器類)貯蔵用の器、仏具類、祭器類と、日常生活に欠くことのできない用途をもった器の出土が注目されよう。その他の説明については次頁(16頁)の第2表出土陶磁器一覧表を図版10の出土陶磁器と照合して比較検討して下さい。

第6図の(1)は外堀より出土した古瀬戸灰釉合子の底部破片であり鎌倉後期に属している。第6図の(2)は第22号竪穴より出土した古瀬戸灰釉合子の底部破片であり、(1)と同様、鎌倉後期に属している。(1~2)はともに仏器類に利用されたものと思われる。(2)は糸切り底になっていた。(3)は外堀出土の美濃産のこね鉢底部破片であり、鎌倉後期に属している。日常雑器類に含まれる。(4)は江戸期に属するルス釉大鉢の底部破片であり、グリットより出土している。(3)と同様日常雑器と思われる。釉は織部焼に類似したような光沢をもっていた。

(飯塚政美)



第6図 出土陶器実測図

第2表 出土陶器一覧表

図版	番号	名称 器型	部 分	厚さ (mm)	出土場所	製作時代	実測図	備考
10	1	古瀬戸灰釉四耳壺	胴 部	8	外 挿	鎌倉後期		
タ	2	美濃こね鉢	底 部	(9~10)	タ	タ	6	
タ	3	古瀬戸こね鉢	タ	(8~9)	グリット	鎌倉中期		
タ	4	古瀬戸灰釉印花文瓶子	胴 部	7	外 挿	鎌倉後期		梅 唐草文様
タ	5	古瀬戸灰釉合子	底 部	(4~8)	タ	タ	6	
タ	6	タ	タ	タ	第22号堅穴	タ	6	
タ	7	中国青磁碗	胴 部	(4~5)	第23号堅穴	南北朝		
タ	8	古瀬戸灰釉平茶碗	タ	タ	外 挿	室町中期		
タ	9	古瀬戸天目茶碗	口縁部	(3~4)	グリット	室町後期		
タ	10	ルス釉大鉢	底 部	(4~8)	タ	江戸前期	6	
タ	11	瀬戸碗	口縁部	(2~3)	タ	タ		
タ	12	唐津	胴 部	4	タ	タ		

第2節 石器（第7図、図版11）

今回の発掘で出土した石器の総数は15点である。

打製石斧（第7図（1~5）

打製石斧は5点出土、(1～3, 5)は外堀、(4)はグリット内よりそれぞれ出土している。(1)の上部は欠損している。石斧の形は短冊形(1～3, 5), 下部がわずかに聞く撥形(4)の二つに分類できる。剝離面は石器の周囲にまんべんなくゆきとどいている。

石質は硬砂岩(1, 4～5), 緑泥岩(2～3)を利用してあった。重量は(1)は140g, (2)は160g, (3)は190g, (4)は180g, (5)は260gであった。

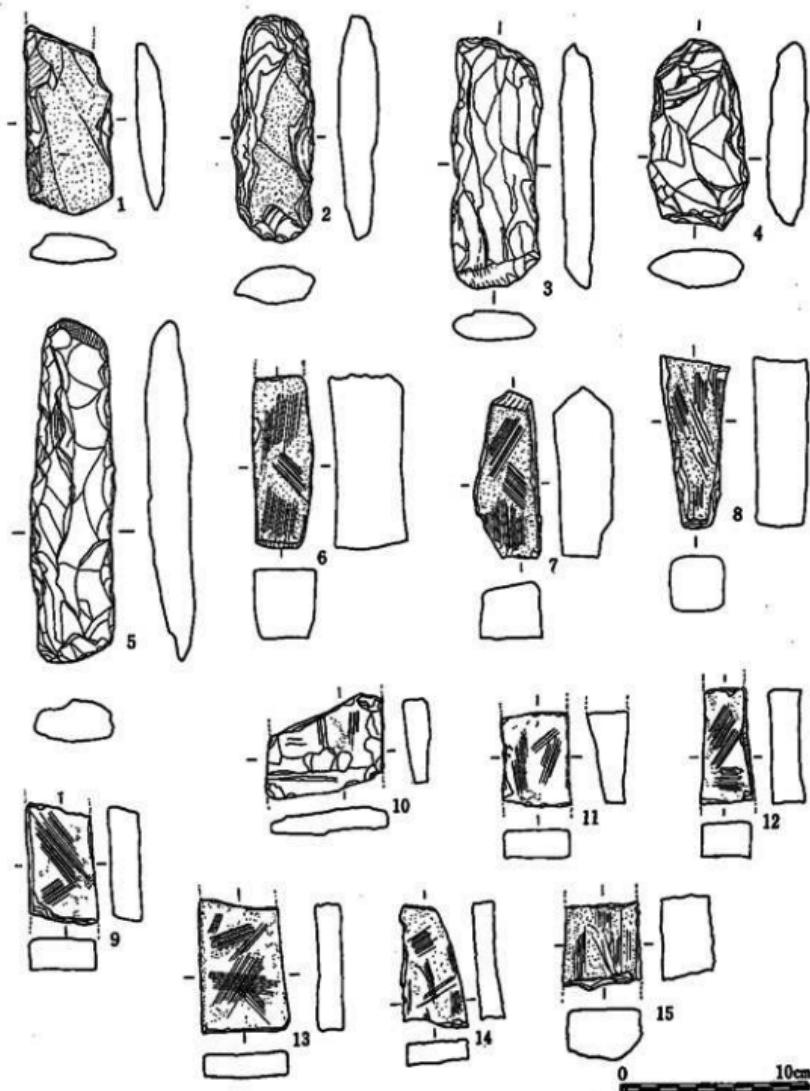
砥石((第7図 6～15))

砥石は10点出土、(6～10)は外堀、11～14)は第23号竪穴、(15)は第26号竪穴よりそれぞれ出土している。上部欠損(6, 13)上, 下部2面欠損(6, 9～12, 15)完型品(7～8, 14)であった。

石質は全て、軟砂岩であった。使用面が両面使用(6～8, 13), 四面使用(12), 片面使用(9～11, 14～15)であり、使用した跡が全般的に顕著であった。

重量は(6)は210g, (7)は140g, (8)は120g, (9)は60g, (10)は40g, (11)は58g, (12)は60g, (13)は80g, (14)は30g, (15)は70gを測定できる。

(15)の表面は赤く焼けていた。(6～15)は全て、中世に属すると思われ、その重量からして携帯用のものと思われる。砥石の内では中研や荒研のうちに属していると思われる。(飯塚政美)



第7図 石器実測図

第V章 まとめ

丸山城跡は昭和54年度、伊那西部土地改良事業（県営畠地帯総合土地改良事業）地区内に該当するとのことで、事業着手以前に発掘調査を行った。調査についての成果は、今までの文献上に記されている事実と、両方面から、一応まとめてみたいと思います。

(1) 丸山城跡の地形的景観について

城跡の東側は天竜川が南北に流れ、右岸第2段丘面上に、北側は細窪（ほそくぼ）と呼ばれている深い洞、南側は犬田切川左岸第1段丘面、すぐ近くに、西方の白沢部落より続いている沢が東西に走っている。総合的にみてみると、南・東・北は自然的要因による沢及び川を利用し、西側は南北に3本（内堀、中堀、外堀）の堀を人工的につくり、防衛的体制をより一層強化なものにしている。

(2) 造構について

今回の発掘及び現存している造構についてであるが、今までにわかつっていた造構は、堀が2本だけであった。今回の発掘で新たに堀が1本発見され、本郭郭は内堀、中堀、外堀の3本より成り立っていることが判明した。さらに、発掘により36基の竪穴の発見があった。現存するのとしては、本郭の東側に帶郭がみられたが、土塁は全く現存していない。ただし、構築当初にはそれがあつたかどうかは、全く不明な状況であった。次に発掘によって検出されたもの及び現存している造構について、簡単にまとめてみようと思う。

(1) 堀

外堀、中堀、内堀の3本存在していることが確認された。外堀の実態は今回の発掘調査でわかつたが、中堀と内堀は埋ってしまって、その正確なる実態はつかめなかった。外堀、中堀、内堀の詳細な状態は第Ⅲ章造構第1節城郭址と堀址に述べられている通りである。

竪 穴

本造構は全部で36基検出された。これらを各項目別に分類して、統計的にまとめてみると次のようになる。平面プランが隅丸方形のもの8基、円形状10基、長円形状4基、ピット状7基、不整円形状3基、梢円形3基、だるま形状1基であった。

規模では切り合い関係がある、片方が不明なもの5基、大きさは東西・南北の2方向からみると、東西の1辺が50cm以下のもの2基、50cm～1mのもの16基、1mから50cm以下のもの11基、1m50cm以上のもの1基であった。南北の1辺が50cmから1mの範囲内にあるもの12基、1mから1m50cmの範囲内にあるもの16基、1m50cm以上のもの7基であった。

深さは50cm以下のもの19基、50cmから1mの範囲内に含まれるもの13基であった。造物の出土したのはわずかに2基だけであり、陶磁器としては第22号竪穴より鎌倉後期古瀬戸灰釉子、第23号竪穴より南北朝青磁碗の出土がみられ、したがって、この2つの竪穴はそれぞれの時代決定が可能なものと思われる。

第V章 ま と め

(3) 丸山城跡を取り囲く附近の城跡について、附近の人は本城跡を中山城と呼んでいる。

(i) 城平（殿城とも言う）

山本部落の南・諏訪神社の北側、白山社と呼ばれている社の裏山にあり、堀が現存している。昭和47年度中央道発掘調査（註1）の折りに、この近くを掘ったところ、遺構としては地下倉址3、窖址2、遺物としては内耳土器片、黄瀬戸系陶器片、北宋銭、南宋銭、明銭の出土があった。山城の形態が強く、山頂に登ると、上伊那の大部分が手にとるように見え、どうも、烽台的に利用した可能性が強いように思われる。

(ii) 小出城（本城とも言う）

城部落の南、戸沢川の右岸段丘面にある。現在は堀、土塁が残っており、小出氏の居城と伝えられている。昭和49年度大規模農道開通の折りに、（註2）城の西側の郭のはずれ一帯を発掘調査すると、ほぼ完型に近い内耳土器出土、この状態はどうも喪かぶり葬法に近いものと思われた。平山城的な色彩が強い。

(iii) 荒城（新城とも言われ、報告書では村岡南遺跡となっている）（註3）

戸沢川の左岸段丘面、天竜川の右岸段丘面の合わさった地点にある。西春近北小学校のすぐ東側の位置にある。東側に土塁が残っていた。昭和49年度西部開発事業の一環として発掘調査をする。遺構としては、外堀、内堀、柱穴群2、地下倉2、遺物としては中世陶器片（古瀬戸鉄軸、黄瀬戸菊皿）の出土があった。平山城に属していると思われる。

(iv) 唐木弥七宅の東側（報告書では村岡北遺跡となっている）（註3）

当館址は発掘されるまで不明であった。天竜川の右岸段丘面、荒城のすぐ北側に位置し、唐木弥七宅の敷地内にあった。昭和49年度西部開発事業の一環として発掘調査をした。遺構としては堀址、遺物としては、内耳土器片、中世陶磁器片の出土があった。この近くの場所より明治10年頃の開田の折りに、古銭3,300枚程度が出土した。開元通宝から朝鮮通宝まで各種にわたっていた。古銭は桃山時代美濃産の鉄粒壹のなかに入っていた。平山城に属していると思われる。

(v) フブキ垣外の城（報告書では中村遺跡）（註4）

北は戸沢川の右岸段丘、南は戸沢川の左岸段丘、東側は天竜川右岸段丘の合わさった。地点にある。下島部落の西側段丘面が城である。発掘で確認され、今まででは知らなかった。昭和52年度西部開発事業の一環として発掘調査を実施し堀址発見する。平山城に属していると思われる。

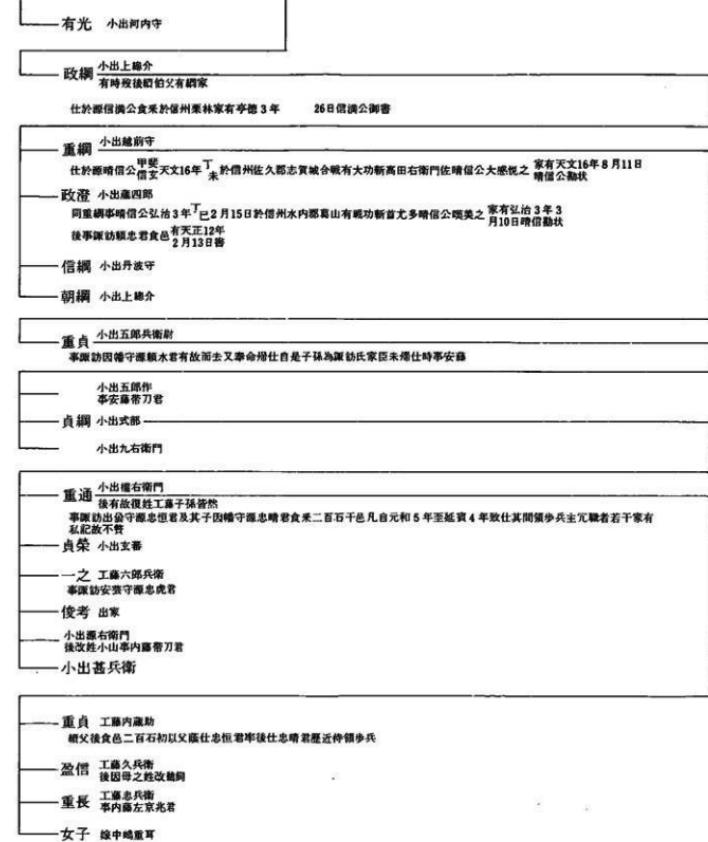
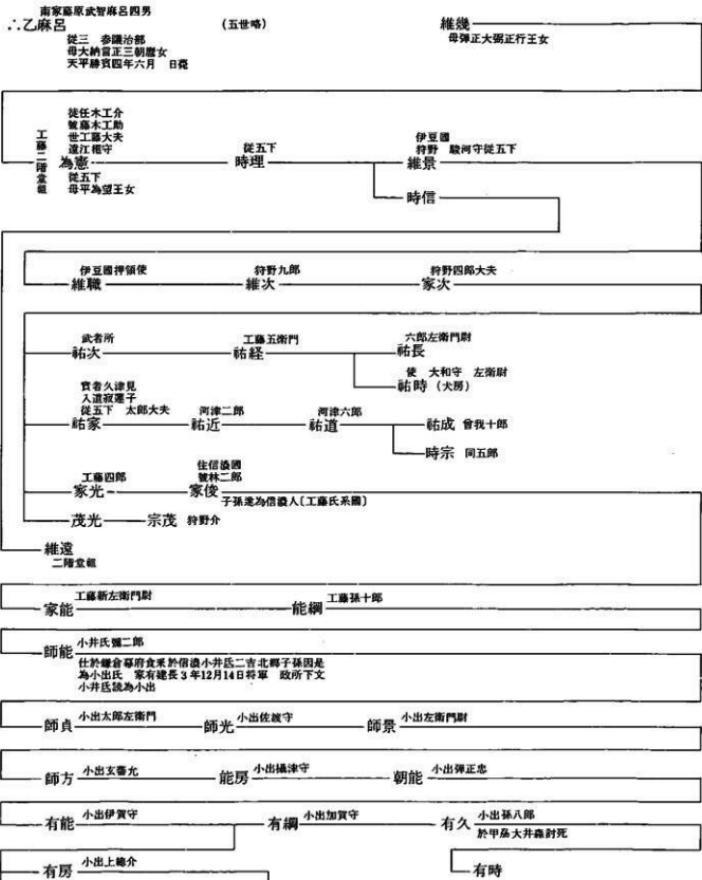
(vi) 内城（報告書ではカンバ垣外遺跡）（註5）

北は戸沢川、南は細窓という洞、東は天竜川右岸第2段丘面にあり、昭和53年度西部開発事業の一環として発掘調査を実施した。

遺構としては中世の堅穴住居址2軒、堅穴21基、柱穴群4、窖址2、井筋1、溝状遺構1、堀址（内堀、中堀、外堀）、井戸址1、集石1、遺物としては内耳土器片、中世陶磁片砾石、古銭、金属製品、自然遺物の出土があった。平山城に属していると思われる。

(vii) 細窓（報告書では南小出南原遺跡と呼んでいる）（註6）

南小出部落の東端、丸山城跡のすぐ南東に位置し、地形的にみてみると、南側は犬田切川左岸段丘面、北側は細窓と呼ばれている洞、東側は天竜川右岸第2段丘面の合わさった地点にある。昭和



第8図 工藤氏の系図（信濃助皇史抄より）

49年度タカノ株式会社土地造成の折りに発掘調査をした。遺構としては堀址、柱穴群の発見、遺物としては中世陶磁片の出土をみた。

(4) 出土陶磁器について

陶磁器については、本文に詳細に述べてあるので、参照されたし、出土陶磁器は鎌倉中期、鎌倉後期、南北朝、室町後期と続いている。その割合は第IV遺物、第1節陶磁器の通りである。

したがって、割合比率の高いのは、その時期に最も繁栄したと考えてよからう。江戸期のものは後世の飛び込みと思われる。器形的には施釉陶器が大部分であるが、なかに混じって、こね鉢のような日常雑器や中国青磁碗のような舶来品も含まれていた。このことは、ある程度有力な武将が住み、それにともなって、日常生活をしていた事実を物語ってくれると思われる。ただ、数量的に少ないので、やはり、若的な城跡で、長時間に亘って、住んではいなかったと思われる。つまり居館的なものと考えなくても良いと思われる。

(5) 存在時期について

この問題については結論的な意見は出せないが、出土した陶磁器の分類による時代決定、その出土量によって、各時代の隆盛、衰退を考えてみなければならない。さらに三つの堀址の断面から推測することも一手段と考えられよう。ただ残念なことに、内堀と、外堀は都合により発掘ができなかったことは残念である。

(4) 出土陶磁器からして、鎌倉中期頃に成立し、鎌倉後期、南北朝、室町後期まで存続したものと思われる。江戸期のものは後世の飛び込みと思われ、直接、本城跡の遺物とは関係ないものと思われる。この時期的な変動は後で述べる(6)の誰れの城郭についてを参照していただきたい。

(6) 誰れの城郭について

この問題を述べるには(4)の出土陶磁器について、(5)の存在時期についての課題と考え合せながら比較検討を推進していくなくては問題解明に到達できないと思われる。

出土陶磁器によると鎌倉後期から室町中期に入ると考えられ、それとともに存在時期も前述した同時期となると思われる。

この時代を歴史的に考えてみると小井豆氏に関係していると思われる。小井豆氏について、『建武中興を中心とした信濃勤王史攷』上巻P83～P87によると次のようになる。小井豆氏は平安時代の終りごろ西春近に住み着き、最初は工藤氏と名乗っていたが小井豆に住んだことより小井豆氏と途中から名乗った。鎌倉時代、室町時代を通じて盛えたが室町中期に大部分は諫訪の方へ移ってしまってしまって、その後は衰退の一途をたどった。

以上からして、みると、小井豆氏の築城した城のなかでも遺物の出土量は少なかった。したがって、丸山城跡は中山城といわれるよう、居館的なものよりも、むしろ、居館をとりまく、周囲の防衛的な城であったことと思われる。すぐ、北側の城跡を内城と言っていることでは合点のいくところである。内城、丸山、細窓の三つの城跡は単独ではなくて、一つの城郭群を成していたものと思われる。であるからして、細窓は外城的な存在、丸山城跡は中山城的存在、内城は本城的な存在価値をもっていたと思われる。

丸山城跡報告書作製に当っては、地元の故辰野伝衛氏（生前に多くの資料を筆者に提供してくれ

第V章 まとめ

た)，瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗広氏，現場に何度も来訪され，適切な助言をして下さった宮田村教育委員長向山雅重氏の各位に対して，心より感謝の意を表するものであります。

(飯塚政美)

参考文献

- 註1 日本道路公団名古屋支社，長野県教育委員会刊 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書 一伊那市西春近一昭和47年度
- 註2 伊那市教育委員会，南信土地改良事務所刊 小出城(城南)浜射場遺跡 昭和49年度
- 註3 伊那市教育委員会，南信土地改良事務所刊 東方A・村岡北・村岡南・常輪寺下・北条遺跡 昭和49年度
- 註4 伊那市教育委員会，南信土地改良事務所刊 中村遺跡 昭和52年度
- 註5 伊那市教育委員会，南信土地改良事務所刊 カンバ垣外遺跡 昭和53年度
- 註6 伊那市教育委員会，タカノ株式会社刊 南小出南原遺跡 昭和52年度
- 吾妻鏡 吉川弘文館(国史大系)
- 尊卑分脈 吉川弘文館(国史大系)
- 伊藤富雄 工藤文書の研究 伊那路(4の11～12 5の24)
- 篠田徳登 伊那の古城 伊那毎日新聞社
- 市村成人 建武中興を中心とした信濃動王史(上巻・下巻)
- 小室栄一 中世城郭の研究 人物往来社
- 大態城跡遺跡調査団，諏訪市教育委員会刊 諏訪市大態城跡遺跡
- 長野県上伊那飯島町教育委員会，南信土地改良事務所刊 唐沢城
- 飯島町教育委員会 建設省飯田国道工事事務所刊 本郷南羽場・陣垣外
- 有賀積男 小井豆文書とその郷土の背景(信濃六卷6号)

図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を西側より眺む



中 塔



城郭の中郭部



外堀（北側から眺む）



外堀（南側から眺む）



外堀の真中附近



外堀の地層



外堀の地層



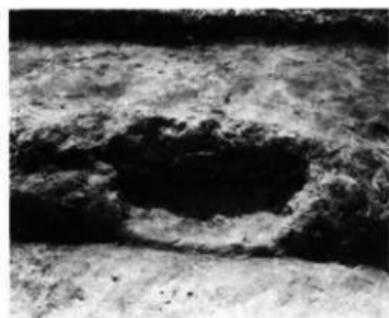
第22~27号堅穴（南側から眺む）



第1号竪穴



第2号竪穴



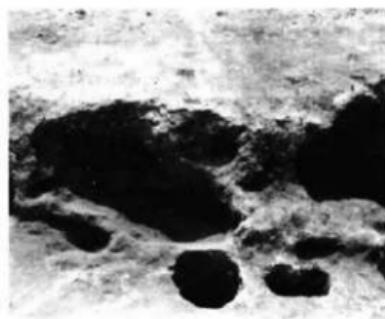
第3号竪穴



第4号竪穴



第5号竪穴



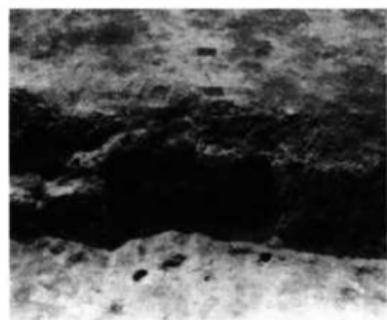
第6号竪穴



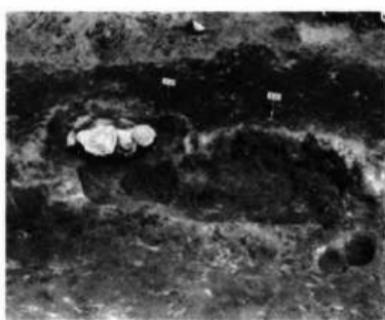
第7号堅穴



第8号堅穴



第9号堅穴



第11・12号堅穴



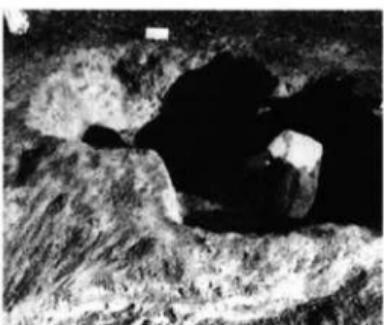
第13・14・15号堅穴



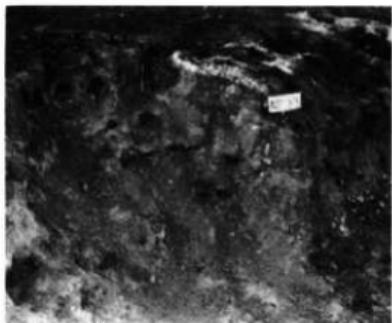
第16・17・18・19号堅穴



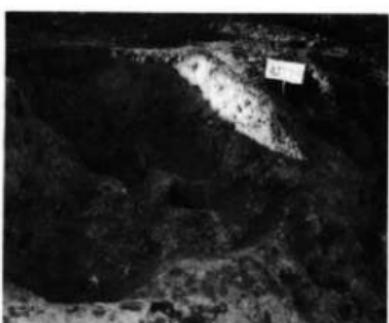
第30号堅穴



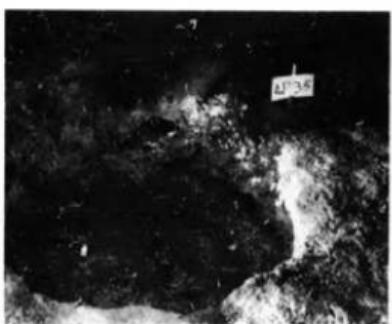
第32号堅穴



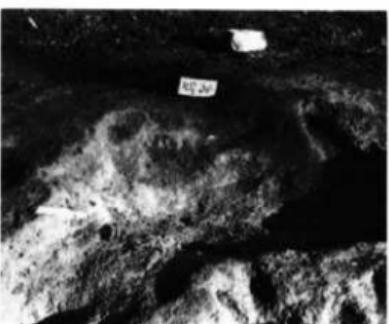
第33号堅穴



第34号堅穴



第35号堅穴



第36号堅穴



砾石出土狀況



陶器出土狀況



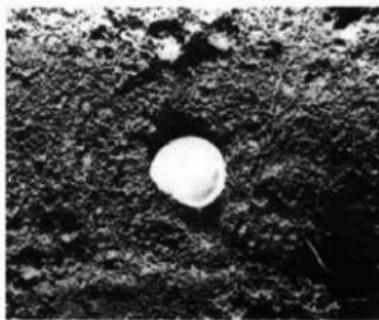
砾石出土狀況



陶器出土狀況

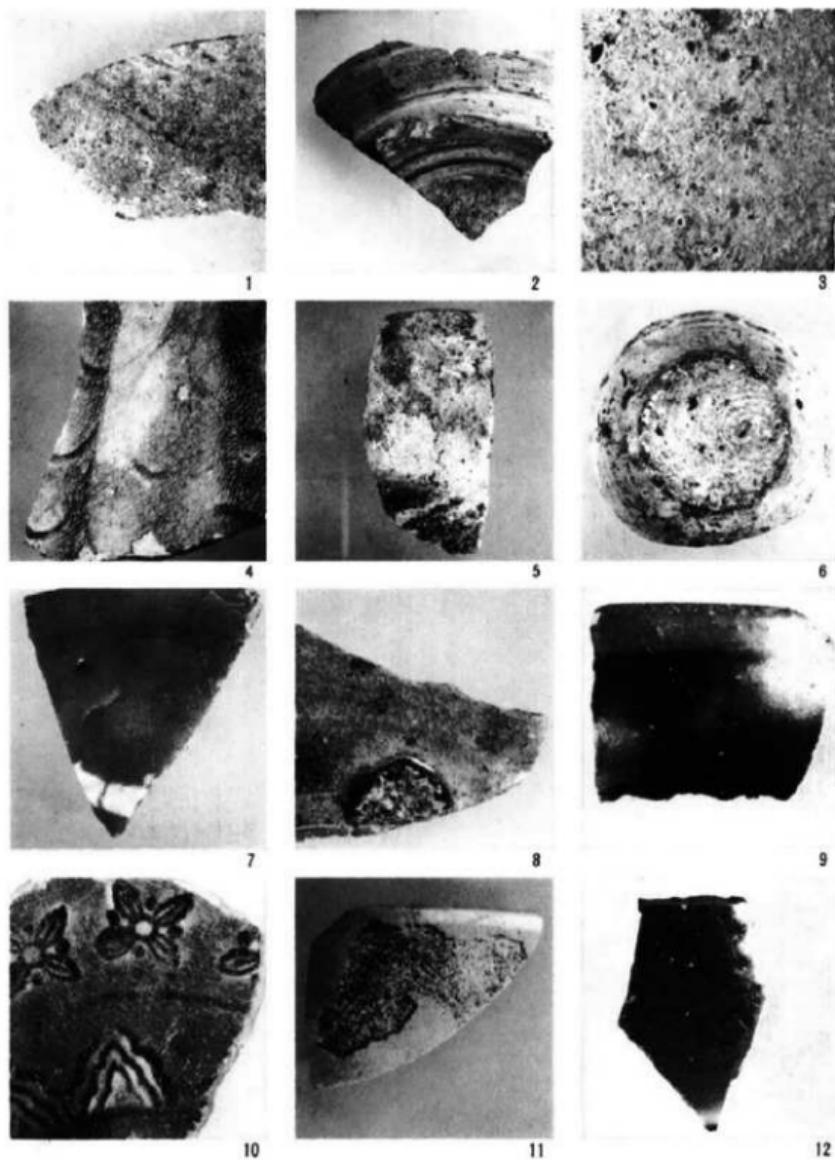


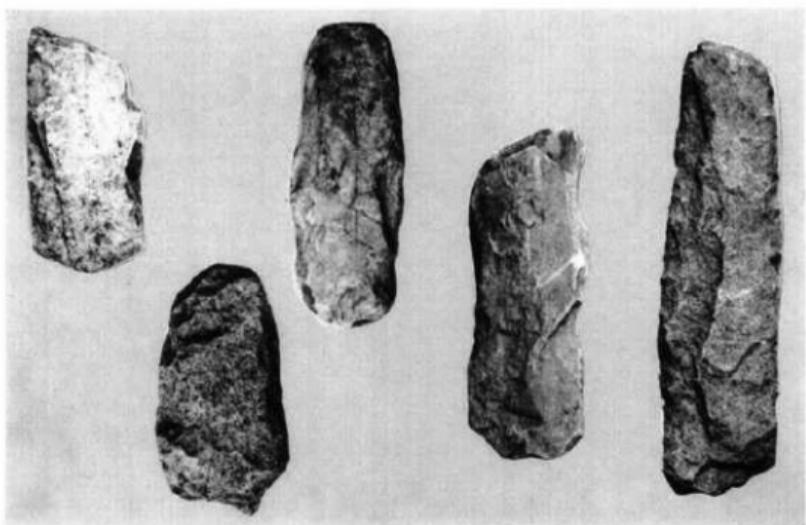
石器出土狀況



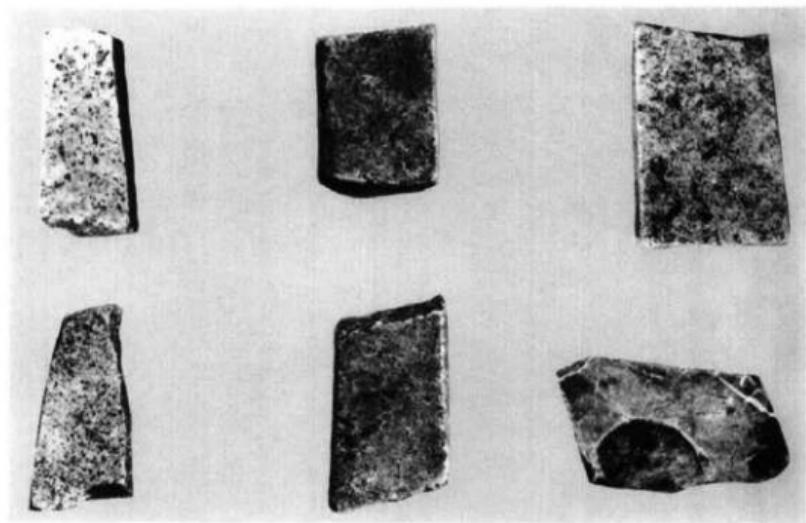
陶器出土狀況

圖版 10
出土陶磁器





出土石器



出土石器

九山遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月15日印刷

昭和55年3月17日発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県長野市西和田470

信毎書籍印刷株式会社
